

に古錢に依て其の幾分を發見した位であるのに、余は比較的容易に法師の時代に猶ほ存立してゐた筈の建築物の遺跡を認めることが出来た。斯様な土地でする探險事業で、千年前に溯ると否とは其の相違大なりと言ふべきであるが、余は幾分たりとも眞正な發見をしたと言ふやうな自負心を起すものではない。参考とする圖書なども殆ど無い(西域記の譯文以外に参考とすることの出来た圖書は全部この註解中に収録してある)やうな譯であるから、其の點を慎しむと同時に、此の註解は問題に對して直接的立證を與へる外、何等特別の價值を有つものでないことを斷つて置きたい。さういふ譯であるから、講述する範圍も只だ實地に視察した地方、即ちヒンヅクーシユ Hindou-Koush 山脈の南方バレーミヤン Bâmyân からヂェララバード Djelalabâd までの間に極限する次第である。

前記の通り範圍を限定したからとて、玄奘法師のアフガニスタン旅行の道筋を(少くとも此の講義の目的たる往路に關しては)其の全線に互つて遺憾なく決定することが容易でないと云ふ譯ではない。之れを決定するには、法師の